

令和5年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月21日実施)	総合評価(3月29日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	自立と社会参加をめざし、カリキュラムマネジメントの視点を踏まえ、小・中・高一貫した教育課程の編成と、わかりやすい授業づくりに取り組む。	卒業までの12年間の系統性・連続性を意識し、子どもや地域の実態を踏まえた教育課程の編成実施、評価を行う。  小・中・高それぞれのライフステージで身につけさせたい力を確認し、わかりやすい授業実践をする。	学部研究の成果を踏まえ、子どもの学びを支える地域社会とのつながりや、小学部入学から高等部卒業までの系統性、連続性を意識した教育課程の編成、実施、評価を行う。  小・中・高それぞれのライフステージにおける指導支援の留意点、工夫すべき点を共有し、引き続き学習内容の整理を行い、本校の地域性を踏まえ、系統的に地域資源を活用した教育実践につなげていく。	自立と社会参加をめざし、カリキュラムマネジメントの視点を踏まえ、小・中・高一貫した教育課程の編成、実施、評価ができたか。  小・中・高それぞれのライフステージで身につけさせたい力を確認し、わかりやすい授業実践をすることができたか。	学部研究の成果を活かし、カリキュラムマネジメントの視点を踏まえ、一貫した教育課程の編成、実施、評価ができた。  小・中・高それぞれの段階で身につけさせたい力を確認し、工夫すべき点を共有し、学習内容の整理を行うことができた。	それぞれの学部研究の成果を活かし、何を優先的に行うかを明確にし、共通認識をもって授業実践と評価を行う必要がある。  卒後の生活につながる知識や身につけさせたい力を整理し、校内だけではなく、地域の社会資源を活用して授業を展開する必要がある。	・プールが使用できないことは、とても残念である。体育センターや地域の施設を利用して実施できないか。⇒検討していく。  ・ICTについて、一人一台端末になることは良かったが、管理はとても大変だと思う。⇒これまでは一括管理であったが、今後は、各教室での管理となる。	カリキュラムマネジメントの視点を踏まえ、ある程度一貫した教育課程の実施、評価ができた。実践する際は、教員間で共通認識を持つことが必要である。  小・中・高それぞれの段階で身につけさせたい力を確認し、工夫すべき点を共有し、学習内容の整理を行い、わかりやすい授業実践をすることができた。	小学部入学から高等部卒業までの系統性、連続性をより意識した指導支援を行い、一貫性のある教育を実践していく。  本校の地域性を踏まえ、系統的に地域資源を活用した教育実践をしていく。実際に活用できる社会資源を発掘して、利用をしていく。
2	児童・生徒 指導・支援	チーム支援の視点を重視し、児童・生徒個々の教育的ニーズを適切に把握し、「主体的に学び行動する力」を育成する指導・支援を組織的に行う。	客観的アセスメントについて、学校全体での共通認識を持ち、アセスメント結果を踏まえてケース会を実施し個別教育計画に反映していく。  アセスメントの有効性について検証を続けるとともに、授業づくり、指導支援の実践に有効活用していく。	各学部で採用した「客観的アセスメントツール」を活用し、共通言語を用いてケース会議を実施し、個別教育計画に反映させ、PDCAサイクルに則って実践していく。  客観的アセスメントを有効活用し、授業の年間計画の立案や授業づくり、授業改善、授業実践を行う。	チーム支援の視点を重視し、児童・生徒個々の教育的ニーズを適切に把握し、「主体的に学び行動する力」を育成する指導・支援を組織的に行うことができたか。  アセスメントの有効性について検証を続けるとともに授業づくり、指導支援の実践に有効活用していくことができたか。	アセスメントツールや共通言語を用いて、児童・生徒個々の教育的ニーズを適切に把握し、「主体的に学び行動する力」を育成する指導・支援を学校全体で行うことができた。  アセスメントの有効性について検証を続けながら、授業づくり、授業改善等、指導支援の実践に有効活用していくことができた。	各学部で採用した「客観的アセスメントツール」を活用し、将来を見据えた個別教育計画を作成し、指導支援を行っていく必要がある。  わかりやすい授業に関する情報共有について課題があるので、チームで同じ視点を持ち指導に取り組んでいく必要がある。	・教員の年齢がアンバランスで、若手への伝達が難しい状況がある。「同僚性」がキーワードで「チーム学校」をいかに作っていくかが今後重要になってくる。  ・「アセスメント」等共通の物差しを持つことが大事。「教員皆」で「子どもたち皆」を見ることができるよう、現在行っていることを継続して取り組んでいく。	アセスメントツールや共通言語を用いて、児童・生徒個々の教育的ニーズを適切に把握し、「主体的に学び行動する力」を育成する指導・支援を学校全体で行うことができた。  アセスメントの有効性について検証を続けながら、授業づくり、授業改善等、指導支援の実践に有効活用していくことができた。	各学部において「客観的アセスメントツール」を活用し、共通言語を用いてケース会議を実施し、個別教育計画に反映させ、PDCAサイクルに則って実践していく。  アセスメントを有効活用し、授業の年間計画の立案や授業づくり、授業改善、授業実践を行う。

3	進路指導・支援	一人ひとりの将来の自立と社会参加のあり方を見据え、発達段階とライフステージに沿った進路指導・支援を組織的に行う。	自己選択・自己決定を意識した授業や活動を実施し、地域との協働や地域の施設の活用を継続し、自立と社会参加に向けた進路指導・支援を行う。	最新の移行支援に関する動向等についての情報収集に努める。学校運営協議会の委員からの意見も求めながら、自立と社会参加という視点を意識した指導支援に取り組む。	一人ひとりの将来の自立と社会参加のあり方を見据え、発達段階とライフステージに沿った自己選択・自己決定を意識した授業や活動を実践し、進路指導・支援を組織的に行うことができたか。	個々の発達段階とライフステージに沿った自己選択・自己決定を意識した授業や活動を実践し、ある程度、小学部段階から進路指導・支援を組織的に行うことができた。	引き続き、卒業後の生活を見据えた授業を展開していく必要がある。学校の中だけで通用する常識と社会の常識のずれを意識があることを意識し、指導支援を行う必要がある。	・卒業後の自立と社会参加を見据えて、教員の「さん付け呼称」の徹底については、継続して取り組んでほしい。	個々の発達段階とライフステージに沿った自己選択・自己決定を意識した授業や活動を実践し、ある程度、小学部段階から進路指導・支援を組織的に行うことができた。	自立と社会参加という視点を意識した指導支援に取り組む。特に言葉遣いや適切な距離感については、日常の指導支援場面でより強く意識する必要がある。
4	地域等との協働	共生社会の実現に向けて、地域におけるセンター的機能を継続するとともに、コミュニティ・スクールとして地域との協働による教育活動を展開することができたか。	F棟及びG棟の整備や活用について、学校運営協議会の将来構想部会、切れ目ない支援部会と連携しながら、将来構想チームを中心に検討し、実際の活用につなげていく。  「にんにく計画」や「交流フェスティバル」等を契機に地域との協働をさらに発展させる。	F棟・G棟内の整備については、学校運営協議会委員からの意見聴取を行い、短期的、中長期的な整備計画を立案する。  「にんにく計画」や「交流フェスティバル」の意義について全校で共有し、地域との連携・協働を推進する取り組みとして、更に発展させる。	共生社会の実現に向けて、地域におけるセンター的機能を継続するとともに、コミュニティ・スクールとして地域との協働による教育活動を展開することができたか。  二事業について、地域との連携協働を推進する取り組みとして、更に発展させることができたか。	センター的機能を発揮し、コミュニティ・スクールとして地域との連携協働を常に意識しながら教育活動を展開することができた。  地域や関係機関の方々と顔の見える形で連携協働することができ、双方にとって実りある取り組みとなっている。	F棟・G棟内の整備については、学校運営協議会委員からの意見聴取を行い、短期的、中長期的な整備計画を検討した。引き続き、具体性のある活用方針をまとめていく必要がある。  「にんにく計画」を実施する中で学福農商の連携協働事業として発展させていきたい。	・瀬谷支援学校の立地する地域の皆様は、とても温かい。「地域資源マップ」の作成をとおして、今後も地域と一緒に考えていければと思った。  ・「にんにく計画」について、小学生の児童は、お客さんではなく、当事者としての自覚を持っていることが分かった。	センター的機能を発揮し、地域になくはない学校として、良好な関係を保って連携協働や交流活動を展開することができた。  より一層、地域や関係機関の方々と顔の見える形で連携協働していく。双方にとって実りある取り組みとなるよう密に連絡を取り合う必要がある。	F棟・G棟内の整備については、学校運営協議会委員からの意見聴取を行い、具体的な活用方法をまとめ、できることから始めてみる。  「にんにく計画」を実施する中で学福農商の連携協働事業として発展させるために、切れ目ない支援部会と連携して取り組んでいく。
5	学校管理 学校運営	すべての教職員が、教育課題を適切に把握し、解決に向けて組織的に対応していくことのできる学校体制を確立する。	組織的に業務改善、課題改善を行うシステムを定着させ、個人ではなく、チームで取り組むことを再確認する。	「よりよい学校づくり、業務改善に向けた提案」のシステムを活用し、PDCAサイクルに則り、業務改善に結び付ける。  ホームページを充実させるなど地域の関係機関に積極的に発信をし、支援学校としての姿勢を説明していく。	「よりよい学校づくり、業務改善に向けた提案」のシステムを活用して教育課題の解決に向けて組織的に対応する学校体制を確立することができたか。  ホームページを活用し、支援学校としての本校の姿勢を地域に向けて発信することができたか。	「よりよい学校づくり、業務改善に向けた提案」のシステムを活用し、喫緊の課題や中長期的な課題について共有し、課題解決に向けた提案を行うことができた。  ホームページを活用し、支援学校としての本校の姿勢を地域に向けて発信することが概ねできた。	教育課題を整理し、PDCAサイクルに則り、業務改善に結び付ける意識が定着したので、今後も継続していく。  発信する情報量や更新の頻度については、できる範囲で改善していく必要がある。	・災害時の学校の在り方については、個人情報管理、学校を再開することの大変さなど様々な課題があるが対応していくことになる。⇒今後、近隣住民にカギを預けるなど、何かあったときの対応を今後検討する必要性について職員に話しているところである。	「よりよい学校づくり、業務改善に向けた提案」のシステムを活用し、喫緊の課題や中長期的な課題について共有し、課題解決に向けた提案を行うことができた。  ホームページを活用し、支援学校としての本校の姿勢を地域に向けて発信することが概ねできた。	カリキュラムマネジメントに積極的に取り組み、教育課題を整理し、PDCAサイクルに則り、業務改善に結び付ける。  発信する情報量や更新の頻度については、できる範囲で改善していく必要がある。